公益社団法人
日本語教育学会
―世界の日本語教育―

（ヨーロッパ）
2023 年 10 月

学習者が演じる小噺
ー国際小噺合同発表会（KKGH）の活動から見えてくるものー

畑佐一味（パデュー大学）

１．はじめに

本稿は 2020 年コロナ禍に行われた国際交流基金ロンドン日本文化センター（以下、JF ロンドン）主催のオンライン研修会「教師のための小噺ワークショップ―学習者による小噺パフォーマンスの指導方法―」の参加者が中心になって始まった国際小噺合同発表会（以下、KKGH）というグループの成り立ちと活動の報告である。このグループの活動は日本語学習者に落語の小噺を覚えてもらい、それを人前で発表することが中心である。日本語教育での小噺の利用とその効果については「みんなの小噺プロジェクト」（Web サイト）ほかで詳しく記述してあるのでそちらを参照されたい。（久保田・畑佐 2009, 畑佐 2010, 有田 2016, 森 2018, 五十嵐 2022）(1)

２．きっかけ　JF ロンドン主催のワークショップ 2020

2020 年 6 月に JF ロンドンが「日本語教育・日本研究のための落語の実演と入門講座」と題したオンライン落語イベントを主催し、ヨーロッパの国々の日本研究者、日本語教師、日本語学習者などを中心に 120 名ほどの参加者があった。落語と寄席に関する講演と日本からライブ参加したプロの落語家の実演を鑑賞した。筆者は JF ロンドンの日本語教育アドバイザー藤光由子氏（当時）からの依頼で、このイベントの司会と講師をつとめた。コロナ禍での開催であったが、評価アンケートからは満足度の高いイベントであったことが伺えた。(畑佐・米本・濱田 2020)　その後、このイベントの発展形として、日本語教師のためのオンライン研修会「教師のための小噺ワークショップ―学習者による小噺パフォーマンスの指導方法―」が企画され、同年 10 月末に開催された。（藤光 2021）このワークショップが発端となり、今回の活動が始まった。

単発のワークショップは一過性なものになりがちな中、JF のアドバイザーと協議を重ね、ワークショップの効果の継続性を重視した構成に練り上げた。そのための方策として、以下のような事前課題一つと事後課題二つを取り入れ、活動の継続を保証するような内容にした。これに伴い、他のワークショップより参加条件がきびしくなり、参加希望者にも責任とそれなりの時間を使うことが要求された。参加費は無料で、当日のワークショップの長さは 3 時間ほどであった。

１　事前課題：ワークショップの四日前までに、自分の小噺パフォーマンスを録画し、YouTube にアップロードする。

２　事後課題１：ワークショップでの講師からのフィードバックやピア・フィードバックを基にして、もう一度小噺を録画し、再提出する。（提出後、フォローアップの集まりを行った。）

３　事後課題２：向こう六ヶ月以内に、自分が担当している日本語学習者（最低二人）に小噺指導をする。

JF ロンドンの積極的な宣伝の甲斐もあり、欧州 10 カ国 22 名の日本語教師がこれらの条件を受け入れ、申し込んだ。補習校、生涯教育、高校、大学、文化協会など教育現場は様々だった。

参加者のほとんどは落語初心者であり、小噺を自分で演じたことはなかった。ただし、参加者は一名をのぞき全員日本語母語話者で、言葉

を覚えることや発音に苦労する人はいなかった。また、YouTube にビデオをアップロードしたことがある人はほとんどいなかった。

事前課題はワークショップの四日前が締め切りで、配布資料[2]で渡された小噺のリストから一つ選んで、自分で演じて、それをビデオ録画して、YouTube にアップロードするというものであった。小噺の演じ方に関しては配布資料にある基本的なもの以外の指導はなかった。参加者はやったことがないことばかりを自分でやらなければならない状態になり、困惑したことだろうが、それなりにこなし、ほぼ全員 YouTube の動画を提出した。技術的なサポートは特に用意せず、同僚、友達、あるいは、家族から習うように指示した。（これは少し乱暴だったかもしれない。）YouTube へのアップロードが終わったら、リンクをスラック（Slack）に投稿してもらった。講師はスラックの投稿を通して、提出されたビデオを閲覧し、コメントをつけて、ワークショップに臨んだ。(3)

この事前活動は日本語学習者を指導するためには教師自身が演じることをまず体験する必要があるという考えに基づいており、JF のアドバイザーと相談して行うことにした。人前で演じることの恥ずかしさの体験、それを克服しようとする努力、たった数行の台詞でも効果的に演じることの難しさなどを体験することで、学習者にさせようとしていることへの共感が生まれた。そして、教師自身が受けたコメントやアドバイスは、自分が指導する立場になった時にそのまま利用できる。

ワークショップ自体は二つのグループに分け、二日間にまたがって行った。提出された事前課題のビデオを見ながら、小噺指導の基本を講師がコメントをする形で進めていった。その後、小さいグループに分かれて、お互いのパフォーマンスにコメントをしたり、演じ方の工夫などのディスカッションを行った。最後に全体でまとめを行い、質疑応答で終了となった。

ワークショップ前後で提出された参加者による小噺の例　「教員の小噺」
https://www.youtube.com/watch?v=Jq89b4_g9IA

事後課題１はワークショップの二週間後が締め切りで、16 名の参加者から、小噺パフォーマンスの再提出があった。フォローアップの集まりでは、全員でディスカッションをおこなった。参加者ももっと上手くできるようになりたいという意欲が出てきて、参加者間での交流もあり、講師としては大変満足度の高いワークショップを行うことができたという感想を持った。

３．国際小噺合同発表会（KKGH）の誕生

事後課題１を終えた参加者は事後課題２、つまり六ヶ月以内に自分たちの学生少なくとも二人に小噺指導を実践するという課題に取り組み始めた。しかし、コロナ禍でもあり、参加者の環境によっては、学生が簡単に見つからない場合などの報告があった。学生が見つからないので、家族でもいいかという問い合わせもあった。子供さんが継承日本語学習にあたるので、全く構わないと返事をした結果、小噺活動が家族ぐるみの活動になるというこちらでは想定していなかった進展もあった。

こうして、2020 年冬から翌年夏までの間に、イギリス、フランス、ベルギー、チェコ、スペイン、イタリア、スイス、アイルランド、日本で合計 20 件を超える小噺指導の実践が行われた。（小熊・高木 2022）学校の種類は継承日本

語補習校、高校、大学、語学学校、文化教育、市民大学など多岐に渡り、学習者の年齢も小学低学年から 70 歳までと幅広かった。それぞれの活動での学習者は数名から 20 名程度、頻度も一度から数回と様々だったが、報告からは教師が時間をやりくりして、真剣に課題に取り組んでくれた様子が伝わってきた。その中の一つで 2020 年 12 月にスイス・ヴォー州で行われた活動は、すでにオンライン発表会に発展していた。(エコールクラブ・ミグロこばなしはっぴょうかい 2020)

2021 年から翌年 6 月までに、ヨーロッパ各国の日本語教師会や地域の勉強会で、小噺実践報告や教師のためのワークショップが 10 回以上行われている。（ブランド 2021 で，根元・ブランド 2022，中尾 2022）

事後課題２を通じて、参加者間の仲間意識が強くなり、学校間での情報交換が発生し、協働学習が始まった。その一例として、フランスの継承日本語学校の生徒とチェコのカレル大学の学生を繋げて、オンラインで小噺の練習をしたという報告があった。（川島 2021，川島 2022）

このような流れの中で、参加者が声を掛け合い合同発表会が企画されていくことになる。これが 2021 年 6 月に開催された第一回国際小噺合同発表会となり、実施するにあたり中心的な役割を担ったメンバー 7 名が KKGH というグループを結成する運びとなった。

第一回国際小噺合同発表会は、学習者が演じた小噺を録画、提出したものを主催者が編集し、Zoom で配信するという形で行われた。参加者は 8 カ国から 88 名に上った。また、協力団体となってくれた JF ロンドンは参加賞として、オリジナル扇子（落語用の高座扇子）と手拭いを用意してくれた。

このイベントに向かう時の中心メンバーの活動状況には驚かされた。対面が不可能だったことで、オンライン国際大会を実施することになり、規模も大きくなった。スタッフは大変だったと思うが、イベントは大成功であった。

2021 年 7 月には 2 回目の小噺ワークショップ「小噺実践持ち寄りワークショップ（JF ロンドン主催）がおこなわれ、新たに二期生 15 名が誕生した。また、同年 9 月 25 日～26 日のオンラインイベント「落語と小噺　実演・講演・発表会」（JF ロンドン主催）では KKGH が学習者の小噺パフォーマンスを編集して、プロの落語家の口演の前に前座として登場した。

４　KKGH の活動の維持と発展

国際小噺合同発表会は毎年一回のペースで開催されるようになり、第二回が 2022 年 4 月に 9 カ国から 64 名が参加、第三回が 2023 年 4 月に 8 カ国から 50 名が参加して開催された。内容も少しずつ進化しているが、「発表会はあくまでも発表の場であり、応募者は全員参加、そして、優劣はつけない」という基本理念を貫いている。また、第二回からは教員が演者として参加しなければいけないという条件が追加された。

これまではすべてオンラインで行われていて、パフォーマンスのビデオに多言語で字幕をつけ、日本語がわからない視聴者も理解できるように配慮している。字幕付作業も日本語教育の一環として行われている。

小噺活動の拡大と維持のために、KKGH は「こばなし Dojo!」という活動を 2021 年に開始した。「こばなし Dojo!」は、KKGH のメンバーがホストになって、自由に小噺を練習する場を毎月一度オンラインで提供している。定期的

に開催することで、新しい参加者の発掘や小噺活動の維持に貢献している。これらの活動はすべてボランティアで行われている。

５　これまでの小噺活動から得られた知見

ここでは、KKGH の活動の中から得られた新たな知見について記す。

・継承日本語学習者の場合、家族間でのコミュニケーションが活発化した。
・同じ目標に向かっていることで、学習者が他校の学生とのコミュニケーションに興味を持ち、それを行う場が提供された。
・年齢の違う学習者間でのコミュニケーションが生まれた。
・小噺発表という共通のゴールを持つことで、同じ学校の中で異なったレベルの学習者間でのコミュニケーションが発生した。
・教師が（時には、下手でも）小噺を演じることは学習者にとってポジティブな経験であり、教師と学生が同じ立場になるという共感が生まれた。（教師が演じることの大切さ）
・オンライン発表では、海外に住む家族が観客として参加できた。（日本に住んでいる祖父母、親戚などが喜んだ。）
・現地語の地元ジョークを日本語に訳して、小噺に仕立てたいという要望が複数でてきた。
・翻訳、字幕付という作業が学習の中に組み込まれた。

これらに加え、一つ面白い現象が報告された。国際結婚の家族で母親が日本人で子供さんが小噺パフォーマンスをするので協力をしていたところ、それを見ていた、日本語が得意ではない（あるいは、ほとんどできない）父親が興味を持ち小噺を行うことにした。そして、父親も発表会に参加した。微笑ましい想定外の進展であった。

６　まとめ

コロナ禍という誰もが憂鬱で、閉塞感を感じていた時期に、何か明るいことができないかと始めた活動が実を結び、予想以上の展開があった。ワークショップから始まった KKGH の一連の活動はいろいろな「壁」を壊したと言えそうだ。学校間の壁、日本語学習のレベル間の壁、年齢の壁、国・地域の壁、学習者と教員の間の壁、そして、家族間の壁も。（川島 2023,ブランドほか 2023,小熊 2023）

脇から見ていて、KKGH の素晴らしいところは、メンバー達がみんな活動自体を楽しんでいることである。このようなポジティブ・エネルギーの活動はさらなる広がりの可能性を秘めている。三年前は、落語と小噺の区別も知らなかった一期生達が今は後輩を指導できる立場に成長してきたことも頼もしい限りである。

今後は対面での活動が増えてくるであろう。小規模でも、ライブで行うという新しいチャレンジが見えてくる。オンライン活動で培ったノウハウをうまく使いこなしながら、このチャレンジにどのように答えていくか、これからの活動が楽しみである。

また、非母語話者の教員の方達にも是非チャレンジしてもらいたい。そのための新たなワークショップも企画したい。

これまで何度も大小ワークショップを行ってきたが、2020 年のワークショップから今日の KKGH に至る経験は圧倒的であり、そのような機会を持たせてもらったことを感謝する。

注

(1) 小噺とは落語の形式をたもった短い滑稽話（落とし噺）である。落語スタイルのジョークと言ってもいい。「時そば」「寿限無」などは落語本編であり、小噺ではない。プロの落語家は本編に入る前のウォーミングアップ（「まくら」とよぶ）で小噺を使うことが多い。

（2）配布資料の URL
https://one-taste.org/kobanashi/wp-content/themes/kobanashi/img/instruct/kobanashi-workshop-2022.docx

（3）スラックは主に企業用のチャットツールで、投稿した情報を共有したり、コメントしたりすることが簡単にできる。参加者はスラックの使用に関して、特に技術的な問題はなかった。

参考文献

有田佳代子 (2016) 「演劇的手法を用いた言語教育授業の実際と評価」 2016 年度共同研究報告 『人文社会科学研究所年報』 敬和学園大学
<https://one-taste.org/kobanashi/wp-content/themes/kobanashi/img/documents/Arita-2017.pdf> （2023 年 10 月 10 日）

五十嵐江理 (2022) 「日本語会話授業における小噺活用の効果について」『鳴門教育大学国際教育協力研究』第 16 号，85−91.
<https://naruto.repo.nii.ac.jp/records/29702> （2023 年 10 月 10 日）

小熊利江・高木三知子 (2022) 「小噺を用いた日本語授業の実践と教師の内省ーベルギーの大学における オンラインでの体験型学習ー」 34 回日本語教育連絡会議論文集, 42-49.
<https://biblio.ugent.be/publication/8751275> （2023 年 10 月 10 日）

小熊利江 (2023) 「ベルギーの大学における小噺授業 2 年目の取り組み —オンラインでの体験型の日本語学習—」 第 26 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（口頭発表）

川島眞紀子（2021）「カレル大学における 2020 年度の活動」世界の日本語教育の現場から（国際交流基金日本語専門家レポート）
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/touou/czech/2021/report01.html> （2023 年 10 月 10 日）

川島眞紀子（2022）「2021 年度、欧州各国の先生たちとの協働作業を通じて」世界の日本語教育の現場から（国際交流基金日本語専門家レポート）
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/touou/czech/2022/report01.html> （2023 年 10 月 10 日）

川島眞紀子（2023）「学習者と教師双方における学習プロセス向上のための小噺の可能性」 第 26 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（口頭発表）

久保田佐由利・畑佐一味 (2009) 「一人で演じる日本語会話：小噺プロジェクトの実践報告」第 16 回プリンストン大学日本語教育フォーラム論文集 pp. 20-31
<https://pjpf.princeton.edu/sites/g/files/toruqf1151/files/pdf/07-hatasa-kubota.pdf> （2023 年 10 月 10 日）

中尾桂子 (2022)「日本語教員のための小噺ワークショップ 2022」スペイン日本語教師会 第 33 回 APJE 定例研修会報告
<https://www.apje.es/wordpress/ja/2022/06/15/20220423-blog-jp/> （2023 年 10 月 10 日）

根元佐和子・ブランド那由多 (2022) 「小噺を授業に！教師たちの学び報告」 AJE ニュースレター第 69 号
<https://www.eaje.eu/ja/nl-article/46> （2023 年 10 月 10 日）

畑佐一味 (2010) 「日本語教育、柳家さん喬、と私」『中央評論』271 号: 63-72
<https://one-taste.org/kobanashi/wp-content/themes/kobanashi/img/documents/chuohyoron.pdf> （2023 年 10 月 10 日）

畑佐一味・米本和弘・濱田典子 (2020) 「伝統芸能を題材にしたオンラインでの教育活動 ― 落語と紙切りを用いた実践事例 ―」『むすぶ』日本語教育学会
<https://www.nkg.or.jp/musubu/contents/kaigai/20200801_2178704.html>（2023 年 10 月 10 日）

藤光由子 (2021) 「日本語教育アドバイザーの仕事　～「学びの舞台」をつくる～」 世界の日本語教育の現場から（国際交流基金日本語専門家レポート）ロンドン日本文化センター
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/seiou/uk/2021/report02.html>　（2023 年 10 月 10 日）
ブランド那由多 (2021) 「小噺で楽しく繋がろう」 AJE ニュースレター第 67 号
<https://www.eaje.eu/ja/nl-article/46>　（2023 年 10 月 10 日）
ブランド那由多・加村彩・高木三知子・遠藤真理 (2023)「教師・学習者の共生の場 -笑いでつながるバリアフリーの小噺発表会-」 第 26 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（口頭発表）
森真由美 (2018) 「落語を利用した日本語教育の研究」金城学院大学大学院 博士論文
<https://kinjo.repo.nii.ac.jp/records/993>　（2023 年 10 月 10 日）

ウェブサイト

エコールクラブ・ミグロ　こばなしはっぴょうかい 2020（スイス・ヴォー州）
<https://www.youtube.com/watch?v=rlgTMpTePXw>　（2023 年 10 月 10 日）
国際小噺合同発表会（KKGH）　ホームページ
<https://sites.google.com/view/kobanashifestival/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0?authuser=0>　（2023 年 10 月 10 日）
小噺ワークショップから「教員の小噺」
<https://one-taste.org/kobanashi/koryukai.html>　（2023 年 10 月 10 日）
みんなの小噺プロジェクト
<https://one-taste.org/kobanashi/>　（2023 年 10 月 10 日）

KKGH の活動年表

2020 年 6 月　日本語教育・日本研究のための落語の実演と入門講座　（JF ロンドン主催）
10 月　教師のための小噺ワークショップ—学習者による小噺パフォーマンスの指導方法—
(JF ロンドン主催)（事前課題→ワークショップ→事後課題１）一期生誕生
12 月~2021 年前半　（事後課題２）小噺指導実践報告や教師のためのワークショップが
10 回以上行われる。

2021 年 6 月　第一回国際小噺合同発表会　(8 カ国　88 名)
7 月　小噺実践持ち寄りワークショップ（JF ロンドン主催）二期生誕生
10 月　落語と小噺　実演・講演・発表会（JF ロンドン主催）
10 月　こばなし Dojo! 開始

2022 年 4 月　第二回国際小噺合同発表会　(9 カ国　64 名)
2022 年～　こばなし Dojo! 継続中

2023 年 4 月　第三回国際小噺合同発表会　(8 カ国　50 名)
2023 年 10 月　こばなし Dojo! 継続中